

こころ日記

「ぼちぼち」

(5) 大丈夫！ええ子やから…

脇野 千恵

教育現場でも、人手不足は深刻です。どこの学校も、教員数の約 2～3割は臨時職員で占められています。仕事の内容や量は、教諭と同じかそれ以上です。担任を持たされることも、重い責任を負う仕事の一つです。

新天地に転勤してまもなく、人手不足の名のもとに、担任をしないかと言われました。確かに担任はとてもおもしろいし、やりがいのある仕事です。しかし、正直報酬が高くて勤務年数が長い教諭が持つべきではないかと常々思っています。

そして、だれも持ちたがらないクラスや生徒がいると、必ずとっていいほど、事情を知らない新転任者にあてがわれることが多いのも教育現場の実態です。

こんなことを、どれだけたくさん見てきたことが…。

その学年は、一クラスの人数が 40

人でした。学年の要であるK子を誰がもつのか？という会議の中で、長い沈黙のあと

「じゃ、私が…。」

と、口にしていました。

まるで、そうなることが決まっていたかのようです。

K子は、運動能力が高く、小学校の時から地元のバレーボールチームに所属し、とても頑張っていました。中学校に入学してからも、やはりバレーボール部に入りました。学力も高く、どちらかという顔だちも良く、笑顔が素敵でした。思春期真っ只の中学 2 年生というのは、教育用語では、“中だるみ”などといって、中学校生活にも慣れ、色々な意味において難しい年頃です。

K子は、小学校時代は優等生だったようですが、私と出会った 2 年次は、学習に意欲がなく、授業中は鏡に向かって化粧をしているか、寝ている。それが

飽きるとふらっと教室を抜け出し、保健室に行くというのが日課でした。

注意をすると、その顔でその言葉？と思うような暴言が返ってきました。が、放課後の部活動だけは熱心で、部活顧問の教師に対しては、敬語が使えました。

中学校の部活動について、色々な考えや意見があります。私自身は、もともと集団競技には関心がなかったのですが、チームで一致団結とやらには一向に理解できませんでした。“連帯責任”という言葉も嫌いでした。チーム競技は今でも、どこか怪しく、どこか封建的で、指導という名の暴力が堂々とまかりとっているなと感じています。試合に勝つことは、顧問にとっての名誉です。また色々な意味においての道も開けます。そして子どもたちにとっては、顧問とのよい関係は、スポーツで高校進学を勝ち取るチャンスでもあるのです。だから、担任より顧問に作り笑顔で挨拶をする生徒が何と多いことか。担任として、なんか寂しいなと感じたものです。

K子もそんな生徒の一人でした。チーム競技では、試合に出られるかどうか、レギュラーメンバーに選ばれるかどうか、子どもたちが一番気になることです。K子もそのことについては、不安だったようです。

しかし、メンバーに選ばれるかどうかは、顧問の裁量です。K子は試合に十分使える生徒でしたが、日頃の学校生活の規律を守れていないことで、何度も

顧問から指導を受けていました。しかもその顧問は、生徒指導担当。担任として、彼女が茶髪、ピアス、喫煙と、段々エスカレートさせる行動を、知らせないわけにはいきませんでした。

K子の家族は、父は医療従事者、母は主婦。3歳上の兄との4人で暮らしていました。長男である兄は、とても優秀で、K子と同じく運動能力の高い子でした。部活動も卒業まで熱心に取り組んでいました。

学校現場では、教員の良くないところですが、兄弟がいるとついつい比べてしまうのが常です。K子もそうでした。

「兄ちゃんは、ええ子やったのに…」
(きつと私の3人の子どもたちも、そうやって色々噂されていたことでしょう。)

K子の問題行動の度に、母親に来てもらいました。母親は、なぜそのようなことをするのか、ヒステリックに怒るばかりでした。

K子と母親の仲は段々と険悪な状況に陥っていきました。そんな最中、思春期にありがちな男女間の問題も持ち上がりました。深夜遅くまで帰らなかったりなど、担任としてどうしてやればいいのか、悩む毎日でした。

3年次になり、担任はやっぱり私しかいないと、K子を受け持つことになりました。

3年生の部活動は、夏の大会で終わ

りです。その大会に出場できるかどうか、K子も気がきではありませんでした。勉強もせず周りを困らせるような問題行動を起こしても、バレーボールだけは好きだったようです。しかし、顧問との関係は悪くなるばかり。部活へは行っていました。叱られることの方が多かったようです。あまりにひどいので、K子が目の敵のような扱いをされているのではないかと疑うほどでした。部活動に行っては、痛めつけられる日々でした。

最後の夏の大会は、何とか出場できたように記憶しています。

部活動が終わり、いよいよ高校への進路に向けての時がきました。K子の両親の願いは、兄と同じ進学校への受検でした。または、スポーツでの進学でした。

しかし、どちらにも無理がありました。

もともと勉強ができる子だったので、特に母親は希望校への進学にこだわり続け、躍起になって彼女を追い詰めていきました。家庭教師をつけられたり、外出を禁じられたりして、彼女は友達と遊ぶこともままならなくなりました。

ある日、K子はそんな生活から逃げるように、家出をしてしまいました。捜索願を出すなど手をつくし、ようやく彼女のいる場所がわかりました。

以前から交際していた彼の家にいるという情報が入りました。彼というのは、その地域では名の知れた、〇〇組関係

の息子でした。そのことは薄々感じていましたが、両親は寝耳に水です。まさかそんな人と付き合っていたとは、母親は嘆き悲しみ、父親はおろおろするばかりでした。

とりあえず、迎えに行くことにしました。学校としては、このことは両親に任せたいと考えていました。しかし、事情がややこしくならないように、担任と学年主任、そして父親で、彼の家に向かいました。

初めての者ばかり、一喝されないかドキドキでした。間違いならえらいことです。しかし、思いの他丁寧な扱いを受け、彼の母親から、

「しばらくお嬢さんを預かりたい。ただし、本人が落ち着けば、必ず自宅まで送らせていただきます」

踊りの師匠というだけあって、母親の着物姿は、“極道の妻”という映画シーンを思い起こさせました。

そのような対応に、父親はもう何も言えず、その場から立ち去るしかありませんでした。

しばらくして、K子は無事に家に戻ってきました。進路先は、親が決めた私学の高校でした。K子には、もうどこでもよかったのだと思います。すべてにおいて無気力な感じが伝わってきました。

K子の中学校生活はどのようなものだったのでしょうか？好きなバレーボールも、顧問との関係がうまくいかずぼろぼろになってしまいました。学習は、

いくら学力が高いとはいえ、やはり追いつかず成績は良くはなりませんでした。

K子は一体何をしたかったのか、どんな将来を思い描いていたのでしょうか。今さらながら、思い返されます。

卒業後、しばらく高校に通っていましたが、トラブルを起こし学校を休むようになり、休学したそうです。

その後、ダンスにのめり込み、家を出て一人暮らしをしていると聞きました。高校は、親の願いがあったのでしょうか、しばらく休学のままだったとか。いつか学校へ戻ってくれるのでは？という思いがあったのでしょうか。

今、K子の近況は伝わってきませんし、知る手立てもありません。親元を離れて元気にやっているのでしょうか？ダンスで生活できているのでしょうか？

私の前から巣立っていった子どもたちが、ちゃんとした大人になり、ちゃんと生活できているか、そのことが今一番気がかりなことです。

K子も幸せであってほしいと願っています。

(中学校教員 脇野千恵)